

令和5年度 第1回徳島県文化創造審議会 議事録

I 日 時

令和5年7月10日（月）午前10時00分から正午まで

II 場所

徳島県庁10階 大会議室

III 出席者

【委員】20名中18名出席

田村禎通会長、吉田和文副会長、阿部曜子委員、有内則子委員、株木清夏委員、清水英範委員、鈴木アヤ子委員、武市信宏委員、永本嘉彦委員、花柳淳吾委員、藤本和史委員、美馬持仁委員、三宅孝典委員、宮脇由里委員、森恵子委員、大和あゆみ委員、横畠亜希子委員、四十宮隆志委員

【徳島県】

後藤田正純知事、

佐藤泰司未来創生文化部長、加藤幸一文化・スポーツ交流統括監兼副部長、益田英栄文化・未来創造課長、ほか

IV 次 第

1 開会

2 あいさつ

3 委員紹介

4 諮問

5 議事

(1) 「徳島県文化芸術推進基本計画」の進捗状況について

(2) 「徳島県文化芸術推進基本計画」の改定について

(3) 意見交換

(4) その他

6 閉会

V 議事の概要

事務局

議事1の資料について説明

会長

今、事務局から説明がございましたが、そのことにつきまして、委員の皆様から何かご意見・ご質問ございませんでしょうか。よろしいでしょうかね。

続きまして、議事の2「徳島県文化芸術推進基本計画」の改定について、事務局から説明をお願いします。

事務局

議事2の資料について説明

会長

事務局案につきまして、ご意見・ご質問ございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、続きまして、議事3の意見交換に移ります。せっかくの機会でございますので、改定に向けてということもありますし、ご意見、また、アフターコロナにおける皆様方の文化芸術活動の状況等につきまして、この際、どのようなことでも結構ですので、ご発言いただきたいと思います。順番をお願いします。

委員

よろしくお願いします。先ほど知事からも熱いメッセージがありまして、身の引き締まる思いなんですけど、私、今まで見てきた中で、さらにここ数年、コロナが明けてから私自身も動きが取れるようになってから得た情報なども含めまして、お話をさせていただきたいと思います。

文化芸術ホールの件に関してですけど、知事の交代ということで、新駅の構想がなくなったということで、これに関して、私も県外にコンサートとか見に行く機会がありまして、ここ最近では姫路のホールですね。アクリエ姫路っていうホールがありまして、姫路の駅から400mぐらいの距離にあるんですけど、徳島の状況に近いものを感じたので、参考でお話できたらいいかなと思います。

実はここは、駅から歩行者デッキというのがずっと走っておりまして、構想していた新駅、つまりホールに直結した駅というものではなくて、徳島で言えば、徳島駅から歩いて移動するという感覚です。で、徳島駅から芸術ホールはだいたい400mぐらいなんですけど、その歩いていく中に、商業施設とかを配置して、さらに経済効果を上げていくということはあるのではないかなというふうに思いました。都会では、歩くこと自体に、そんなに抵抗がないんですけど、徳島に関しては車社会ですから、徳島駅から芸術ホールへっていうこの距離感っていうのが、どう捉えられるかというのは、かなり都会との温度差があるんじゃないかというふうに感じました。そこで、デッキ、歩行者デッキというのを作ることによって解消しつつ、更にその中心市街地の活性化の起爆の一つにできるのではないかなと。これはハードウェア的な話なので、ここで話すべきことではないのかもしれないんですけど、一つヒントになるのではないかなと思ってお話をさせていただきました。多分その完成形に近いのが、西宮の駅ですね。西宮にも立派なホールが駅のすぐ近くにありまして。特に北口駅からのアクセスっていうのは150mぐらいで、大ホール、演劇も可能なところですね。コンサートホールもある。そういった形でやっぱり駅から、このデッキ、雨風しのげる、そういう通路みたいなものがあったら

いいのではないかなということを感じました。で、昔の徳島市文化センターだと駅からどうやって行ったらいいかっていう、なかなか説明がしづらいんじゃないかなというふうに考えたので、これは大変参考になる資料だなと感じました。

またそのホールに関して、愛称であるとか、ロゴマークであるとか、これからの話であると思うんですけど、そういうサイン計画ですね。これを地元のデザイナーを中心に採用していただきたいと。今まで東京発だったような気がします。で、やっぱり地元のデザイナーが疎外感を感じていたっていうのはありまして。県民を巻き込んだコンペ形式でも良いので、何かそういうことが企画できないかなというふうには感じました。あと、ホールついでで言いますと、現在まだ継続しております、あわぎんホール、こちらの方はもう非常に歴史的な価値のある建物ですが、さすがに内装をリフォームしている部分もあるんですけど、実際、県の美術展であるとか、放美展といった大きな美術展を開催する際にですね、やはり設備、脚立がグラグラであるとか、非常に高齢者にとっては、高齢のスタッフや参加者にとっては、厳しいものがあるということ。やはりその設備等の見直し等も、同時に考えて持続可能な使い勝手を向上してほしいというふうに考えました。

これは毛色が違うんですけど、東京の渋谷にヒカリエっていうところがありまして、新しいビルなんですけど、ここの8階にギャラリーがあって、今までと違うなと感じたのが、フロア全体がギャラリーになってます。これだけの喧騒の中で、ここへ行くときごく安らぐというところがあって不思議な感覚を覚えたんですが、実はその8階全部フロアを使ってそれぞれ区切って、いろんな催し物が開催されているということで、同じように、新しい芸術ホールにもそういう常設で、貸し出して可能なギャラリースペースであるとか、セミナー会議、コンサートの配信設備とか整っているようなところがあってほしいかなというふうに感じました。

最後にですが、ここはホールから外れまして街中という所へ目を移しまして、今、聖地巡りということがいろいろニュースになっております。先月の初めに銀河鉄道999や宇宙戦艦ヤマトで高名な松本零士さんのお別れの会に、私行って参りまして、その流れで聖地という、東京の中では聖地にあたる大泉学園駅というところの周辺を散策してまいりました。そこをみたところ、駅を降りたすぐに、キャラクターのオブジェが存在していて、これが常設であります。街中歩いていくとですね、大きなパネルであったり、マンホールに999のイラストとか、そういったアニメのキャラクターを配したものがあると、こういう常設であるということが、いわゆるレガシーというところに直結するんじゃないかなというふうに感じました。同じように徳島にもそれができないのかなと。

ということで、せっかく徳島には ufotable スタジオ、アニメスタジオという立派なものがあります。あまりその、知名度からしたらまだまだ低いと思うんですけど、もう今や飛ぶ鳥の勢いでヒットを飛ばしている「鬼滅の刃」、これの制作のアニメスタジオであります。ですから、せっかくなので、県・市巻き込んで、その「鬼滅の刃」のキャラクターのオブジェであるとか、そういったものがあってもいいんじゃないかと。サブカルチャーの聖地、そういったものができれば、今後面白い展開があるのではないかな

と感じました。長くなりましたが以上です。ありがとうございました。

委員

人材育成の観点から文化活動への若者参加の推進ということで、中学校文化連盟の活動について少しお話をさせていただきたいと思います。昨年度11月に、版画リトグラフのワークショップを、中学校の生徒を対象に行いましたが、今年度は11月4日に海陽町在住でいらっしゃいます桧垣健さんの竹灯りというもののワークショップを行いたいと、そのように考えております。また、昨年度は、全国の中学校総合文化祭が福岡県でございまして、阿南第二中学校のジャズバンドオーケストラが参加をしまして、大変好評であったと。今年度は12月8日に全国大会が沖縄県で開催されまして、今回は美馬市の三島中学校の人権劇がそこに参加する予定になっております。この人権劇の内容といいますと、アインシュタインと美馬市穴吹町の出身の三宅速医師との交流ということで、それを劇にして、命の大切さ、そういうものを劇にしたものを、今回披露してまいろうというふうに思っております。また、11月10日から12日は、県立近代美術館の21世紀館をお借りしまして、中学校の生徒たちの、様々な分野での作品展示、技術や家庭科も含めて様々な展示を行って、そして舞台の方では今回は代表で城西中学校の合唱と新野中学校の人形浄瑠璃をご紹介させていただくと、そういうふうな計画しております。

中学校、高校、そして大学や社会人、小さな時に子どもたちが携わった文化というものは非常に根付いておりまして、私自身もそうですけれども、やはり、小さい頃からこういうふうな本物に触れたり、あるいは体験を子どもたちがしておくということが、やっぱり長い目で見ると、非常に大きい効果の出る投資であるというふうに思っております。一つ一つの催し物、あるいは学校現場における文化活動ということを丁寧にしていくという。そういうふうな共通理解のもとで、中学校の文化連盟も活動しております。また、ご理解のほどよろしく願いいたします。私からは以上です。

委員

よろしく願いいたします。とにかく私共のというか、私の希望としましては、やはりホールを早く実現してほしい。いろんな問題があるにせよ、やはりホールが遅れていけばいくほど、徳島県民の文化の遅れにつながるのではないかと、色々思っております。例えば、弊社にしましても、ホールがないことで実行できなかったようなイベントとかも出てきておりまして、やはり実現に向けていってほしいなあと、4年後というふうに知事おっしゃってましたが、そこに向けて一刻も早く進みだしてほしいと思っております。今はいろんな、例えば先ほどおっしゃってましたが、いろんなもの、展覧会であるとか、コンサートであるとか、もう県外に行くことが当たり前になっている時代になっています。私も実際に行ったりするんですけども、やはり県外に行きますと、そこで、ホテルに泊まります。泊まる、タクシーも使う、それからそこで、ご飯も食べる、お土産も買うということで、やはり全体的な経済の押し上げにはつながるのではないかと

ということをいつも感じています。もしいろんなところに行くたびに、徳島で、もしこのイベントがあったら、駅前のホテルはどうなるんだろうか、駅前のタクシー乗り場はどうなるんだろうか、っていうことをいつも想像します。で、その時に本当にタクシーが、てんてこ舞いするぐらい稼働すれば、タクシーの運転手さんがよくコロナで仕事を辞めたということも聞いたりするんですが、そういったことも多少は防げたりすることにつながっていくのではないかなということ、思ったりしています。

今年になって、福井県と山口県の方にコンサートに行ったことがあります。その時にやっぱり徳島とよく似てるっていうか、向こうの方が都会ではありますが、交通の便が不便だったりするんですけども、シャトルバスを配備して、それでみんなが行けるような体制も取ったりしているので。そういったことも含めて、徳島県でも大きなイベントもやっていくことも、私共としましても、いろんなことを考えながら、もう一度皆さん、自治体の方々とも協力してやっていきたいなというふうに思っています。そういったことから、これからのホールにつきましては、やはり配信設備というのは整えて、配信できることっていうのはすごく必要になってくるので、それは進めていってほしいなあと思います。それと、あと、これ後で質問お答えいただけると思うんですが、なぜその2,000人でないといけないのかということに関しては、少しお伺いしたいなと思っています。というのも、やっぱり、もう少しあわぎんホールよりも大きくて、新しい芸術ホールよりも少し小さめのホールっていうのは、徳島の人口から考えると必要ではないかなというふうには感じておりますので、その答えをいただけたらいいなと思っております。すみません、とりとめのない話になりましたが以上です。

委員

よろしくお願いします。

コロナ禍でみんなのやる気がやはり減ってきているということと、その間に人形浄瑠璃の座員達も高齢化し、若い人たちに入っていただくということが非常に難しくなっています。なので今、県・教育委員会と協力して行っている伝承教室など、新しい取り組みが増えるのは非常にありがたいことと思っております。

また、最近メディアに取り上げていただけることも多く、その効果もあってか中学校の人形浄瑠璃部、民芸部、城北高校、新野高校の人形浄瑠璃部の入部者が増えており、非常にありがたいことと思っております。

あとは大学に、できれば地元大学に人形浄瑠璃部ができたらいと思います。徳島文理大学にありますが、非常に部員が減り、今年、三番叟を本来は6人で2体するところ1体しかできないという状態となっております。やはり大学の人形浄瑠璃部も必要ですし、就職の場も少ないことから県外に出てもまた帰ってきて続けることができる環境も必要で、県外に行ってせっかく熟練してきた技術がそのままになってしまうということも、非常に惜しいと思っております。企業の採用枠に、伝統芸能ができることというのがあればいいなというのは夢のような話なのですが、いつも思っております。

その他にも今、子どものクラブ活動の邦楽の方にも携わっており、年に一回の演奏会を実施していますが、やはり学校によってクラブの人数が増えたり減ったりということ

があります。

演奏会をするにあたって、現在はあわぎんホール全館借り切らないと出演者の控え室や音を出す場所、表現するところというのが確保できないのです。こういったことを考えると、皆さんがおっしゃったホールのお話に戻りますが、大きい発表の場というのは確かに必要です。そして、小さいのはいらぬじゃないか、とは違うのです。小さいところにもそれぞれの役割があって、その舞台と同じようなところで1回音を出して練習してみること、また、今、邦楽が15、6チーム出ることになってるのですが、1つの会議室を3学校3団体ぐらいが順番に使っていくとか、もう慌ただしく交代しないと使えない。そういうことがないように、小ホールもあって、そこで音出しができて、それに伴う楽屋配置もあって、いろんな会議室があって、控室や調弦、調律の部屋が必要で、それはどの音楽団体でも同じだと思います。合唱にしても、やはりまとまって1回発声練習をしてから本舞台に臨むということが必要だと思いますので、そのためにも小ホールは必要です。

先ほど、知事さんがほかの市町村にもいっぱい小ホールがあるとおっしゃいました。確かにありますが、袖がない、楽屋がすごく小さい、公共交通機関から非常に遠い、特に子どもさんと必ず保護者の方が送り迎えしなければならないといった使い便利の問題もあります。また、学校単位で動くにしても、それなりの公共交通機関、それがなかったら、タクシーやバスを使わなければならない。そういうことを考えていくと、やはり徳島駅に近く公共交通機関が便利なところに、いろんな機能を持ったホールが1か所になるとすべて賄えると思います。非常に悩ましい問題ではあると思いますが、やはり出演される団体、出演されなくても利用される団体の方々の思いは一緒だろうと思います。また、ずっと昔から思っているのが、なぜホールはキャパと総工費だけで議論されるのか。そうではなく、どのように使うのか、この事業をするのであればどれぐらいの楽屋が必要で、どれぐらいの小ホールが必要で、どれぐらいかかるのか、舞台の奥はどれぐらい必要か、そのような議論があってこそそのホールだろうといつも思っています。いつもそこがすっ飛んでしまい、総工費やキャパのことばかりで、そうではないと思います。キャパがいくら大きくても舞台の袖がなかったり、奥行きが狭かったりすると、できるイベントは限られてきます。特に市町村のホールというのは、講演会や公民館活動の発表の場というような目的で作られているところが多いので、非常に袖がない。先ほども言いました。袖がない、楽屋の音が舞台の方へ響いてくるところもたくさんありますので、そういうことも考えた上での利用率が低いということだろうと思っています。人形浄瑠璃と関係ないことになりましたが。

人形浄瑠璃は、県から色々ご支援をいただいています。最近、本当にマスコミの取り上げ方がよくなってきたと感じます。みんなに人形浄瑠璃頑張ってるなどと言ってもらいますが、やはりマスコミの力であると思います。ずっと続けてきたことが、皆様方に認識されてきたので、いいものを続けていかなければいけないという考え方に皆さんちょっとずつ近づいているのかなというふうに思っております。

また、中学・高校の人形浄瑠璃部が増えてきたことで、将来に対しては淡い期待を抱いております。

また、先週土曜日の朝刊に載ったのですが、新しい人形座が旗揚げ公演を行いました。5歳から80歳ぐらいまでの方が初舞台です。5歳の女の子が2人いるのですが、1人は3歳くらいからしてます。お人形好きです。やってみたいということで始められて今5歳になり、きちんと人形使いができます。お歳を召した方も、徳島の伝統を見るだけでなく自分もやってみたいという方に参加していただき、こういったイベントには珍しく90名程の方にご覧いただけました。非常に明るい未来を感じて、今は嬉しい気分になっております。

このようなことがどんどんと続いていき、やはり外へ出て皆さんにご覧いただくことで、知っていただき、演じる方もそれが励みになって、また次のステップを踏めるということになるので、場というのが今非常に大事であると思っています。

委員

よろしくお願いいたします。徳島市においても、文化振興事業の取り組みというのは、いくつかしているところがございます。先ほど事務局の方から県の事業の取組内容をお聞きしたところがございますが、なかなかコロナ禍の中で事業実施するにあたって、中止をするっていうことだったり、あとはそのコロナ対策を講じた上で実施するっていうことで、なかなか事業の取り組み効果について、思ったような効果だったりってのが見えない状況にあったと思うんですけど、市においてもそれは同じような印象です。

事業の一つとして学校の方にアーティストを派遣して、生の音楽に触れていただくアウトリーチっていう事業を実施しています。そこで、文化芸術に親しみを持って幼い頃から親しみを持って、見て、触って、体験して、ひいては市内県内の文化芸術の継承という形に繋がっていければと思ってるんですけども。アウトリーチ、小学校の方に年に数回行かせていただくんですけども、子どもってすごく素直な反応をしていただいて、すごく目がキラキラして、体で表現をすぐにされるお子さんだったり、声で、拍手とかで体感で表していただけるとことで、すごく市の事業においても嬉しいと感じる事業の一つであります。その子どもたち、素直な子どもたちをこれからの、文化芸術を継承して行く財産、卵だと思っておりますので、その環境を整えるってというのが、私たちの役割、役目だと思っております。様々な団体の方と共有しながら、これを繋げてもっと広げていければと思っておりますので、今後ともまたよろしくお願いいたします。私から以上です。ありがとうございました。

委員

どうぞよろしくお願いいたします。私、大阪シオンウインドオーケストラというプロの吹奏楽団に所属して活動しております。もともとこの楽団は、大阪市教育委員会事務局所属の大阪市音楽団という楽団だったんですけども、今民営化してコンサート活動の方、重視してやってるんですけども、もともとはそういう教育現場にいた楽団ですので、中学校の例えば、中学校のクラブ活動というもの、指導とかも、あるいは小学校の音楽鑑賞会に回ったりとか、そういうことを中心にやっていました。

現在、教育の現場において部活動の地域移行というのがさかんに今、言われてますよね。これ、文科省の方針なので、多分、もういずれ進んでいくと思います。で、今、徳島県がどういう状態にあるのかっていうのは私、把握できてないんですけども、大阪では既に外部指導員という方々が、音楽大学とかを卒業した方が専門的に入って指導している状態なので、そうなっていくんだろかなと思うんですけども。そうなった一つの背景は、学校の先生の業務の多さっていうんですか、それが問題になったことが原因だろうと言われてるんですけども、ということで、結局、部活動でも飽和状態になってるのじゃないかなと思いますので、地域移行になる。ただし、事実としてこれは吹奏楽部に特化した話になってしまいますけれども、高校、音大へ進んで専門的な芸術家、音楽家になっている方がたくさんいるっていうのもまた事実なんですよ。で、これが今後、ひょっとしたらいい方向に向けられるのであればと思うんですけども、例えばさっき、後藤田知事もおっしゃっておられたように、徳島県に、いくつかの小ホールがありますかっていう話されてましたけれども、地域移行した場合に、学校だけの閉鎖的な、悪く言えば閉鎖的なところでの活動じゃなくて、そういったホールをたくさん使用しながら、専門家の指導を受けながら、より短い時間で、すごくいい成果が挙げられることもまた、考えられます。そういった稼働も一つの方法になるんじゃないかなっていうふうに考えて、そういう地域移行によって、音楽がより発展して、より専門的な人、専門家まで行かなくてもアマチュアの方でも優れた演奏する人はたくさんいます。それが地域社会の中で「あわ文化」として根付いていければ。例えば、大阪では、大阪クラシックというのが、この9月から始まるんですけど、毎年、それはもちろん専門家も出演していますけれども、街中でいろんなコンサートが行われる奈良では「ムジークフェストなら」っていうのがありまして。これも例えば春日大社、春日大社の境内で演奏したりということもあったりして。必ずしも有料でコンサートホールでやってるばかりじゃないんですよ。そういったことが、いろんな町で、その今あるホールを拠点に起こせれば、で、徳島でそういった音楽家、優れた音楽家、芸術家が育っていければ。小ホールって結構必要なんですよ、こういう限られた人口の町ですから、大きな編成のオーケストラや吹奏楽団を呼んで毎回やるっていうわけにはいかないの、そこで育てている小さな人たちが気軽にリサイタルできるような、それがまた市民県民の皆さんに広がってというようなことが、どんどん膨らんでいければ、大きな芸術文化につながっていくと思います。

それと、もう一つはホールなんですけれども、2,000人、1,500人だというよりは、どちらかというと、音響の良いホールがぜひ欲しいと思います。大阪のザ・シンフォニーホールは1,700ですけども、2,000人に達していないんですけども、すごく開放的な空間で、2,000人を超えるようなお客さんが入ってるんじゃないかなって見えるようなホールなんですけれども、とても音響の良いホールです。文理大学にもむらさきホールという、すごくいいホールがあるんですが、誰でもっていうわけにはいかないところもありますので、ぜひ音響の良いホール。それからバレエとかオペラも開催できるような、これ結構設備、後ろの舞台の広がり、これは阿波おどりでもたぶん一緒だと思うんですけども、必要になってくるかと思います。そういったところも

見据えて設計・建築できればいいかなと思っております。今のところはそんな感じですね。ありがとうございました。

委員

よろしく願いいたします。わたくしも文化との関係では、教育委員会におりましたときは、全般にわたって、今日お越しの皆様方にも本当にお世話になりました。

私個人としましては、阿波かるた会、競技かるたを、ずっと大学の頃からやっております、今もですね、全日本かるた協会の徳島支部ということで、阿波かるた会の会長をしております。目下のところは、全国大会をまだ開いたことがないので、全国大会を開きたいというふうに思ってます。また、ホールとは関係ないんですけども、かるたで全国大会開くってというのは、畳が百畳以上になりますので、前にですね国文祭であるとか全国高文祭とかが来た時には、武道館で実施しましたけれども、武道館でも狭いぐらいなんですけど、今は「ちはやふる」っていう映画が流行ったために、ものすごい人数がいて、一回開くと200人ぐらい選手くることで、一つの試合2、3畳はいるようになってくると、かなり広いところがあるということで。これ文化施設というだけではなくてスポーツ施設も含めて、また考えていかなきゃいけないというのが、我々なんです。

それはそれとしてですね、文化といっても、いろんな活動をされていると思います。日本にはたくさんの文化があって、特に、我々のような非常にマイナーなものもありますし、また非常にメジャーな芸術活動というのもあります。大事なものは、まずはどの分野においても、先ほどもおっしゃってましたけれども、担い手を育てていくってことです。これは非常に大事なことで、私も、日曜日ごとに私どもの会の方では練習会、小学生もずっと来てます。小・中・高・大と一般の方も含めて練習会を開催しているんですけども、丁寧に、継続してやっていく環境っていうのを支援していただければなというふうに思います。いろんな面でですね。それとこれ全然話が変わるんですけども、わたくし以前、今、進行中なんですけれども、鳴門のオロナミンC球場の改修にあたって座長させていただいたんですが、先程のホールに通じるところがあるかもしれませんが、やっぱりその時にいろんな関係者の方集まっていたいて、いろんな話をしたんですね。お金も限られてるし、それはもう当然、行政がすることですので、当然。でも、その中に、どれだけの効果を詰め込むのかっていう中で、皆さん方が一致した意見としては、まずは子どもたちにワクワクするようなものを提供できるものを作ってほしいという。そういうのは、大きなコンセプトとしてですね、大人が楽しむのもあるんですけども、やっぱりそれを見る子どもたちが、例えば試合を見てワクワクする、プレーをしてワクワクする。そういったものを一つの大きなコンセプトにしてもらいたいっていうことから始まって、そこでプレーする人、そこで運営をする、例えば審判の方とか、整備をする方とか、運営する立場、それと観客として見る立場、その3つから意見をいただく。いろいろ見えてきたら、例えば雨天練習場がないとできない、簡単なものでもいいけども、試合をするメインのものだけあったのでは、例えばプロを呼ぶとなったら来てくれないとか、では最低限どれだけの基準をクリアすればいいんです

か、っていう話になって。プロの方、元プロの方々にお話をいただいたりとか、ちょうどこの場所で行ったんですけども、いろいろな制約もあれば、必要なものが出てきますから。最後にやはり時代が変わっているんだから10年前、20年前のものを作られてもワクワクしないよと、例えばオーロラビジョンとかも欲しいなあと。それもとても高いので、その中でもいろいろ考えて頂かなきゃいけないとか、時代に即したもので、そして未来の子どもたちに見せられるもの。そういった観点っていう、大きな、まずは一番、大きなコンセプトっていうのをしっかりと作ってもらえたらなというふうに考えています。すみません、とりとめない話でよろしくお願いたします。

委員

失礼します。どうぞよろしくお願いたします。私の方からは、高校の方の文化の活動について、現状等のお話させていただきたいと思うんですが、やはりコロナ禍でかなり活動が縮小されていたとか、止まっていたところもございます。特に11月に県の高文祭というのを開いてるんですけども、昨年やっと入場制限等も含めた上で、コロナ前に近い形で開催ができました。今年度はコロナ以前の状況に戻して、コロナ以前よりもっと盛り上げた高文祭にしたいなということで、今役員の方でも話をしているところです。実は高等学校文化連盟なんですけど、この中には特別支援学校も入っております。県の高文祭部門、例えば美術の部門では特別支援学校の生徒が描いた絵画なども一緒に展示したりということで。まだ全国の方では、特別支援学校の方は参考の参加という形の扱いになっているんですけども、県の方ではできるだけ一緒にやっていきたいなというところで、その辺の、障がい者アートとつながるような部分もしっかりと文化活動の中で取り入れていこうというふうに、今やっているところです。

この12月に、全国の高等学校文化連盟の研究大会というのが徳島の方で初めて開催するので、今準備を進めているところなんですけど、これは生徒ではなくて、全国から教員が集まってきて、それぞれの指導方法であるとか、そういうものをいろいろ研究協議しようという大会なんですけれども。その中で、四国四県で発表するんですが、徳島は吟詠剣詩舞をすることにしております。実はこれ、なかなかご存じない方も多いですが、全国の高等学校総合文化祭では正式な一つの部門というふうになっておりますけれども、実はない県もたくさんあります。全国高文祭が回ってくると、必ずその部門を作らないといけないということで、今回もこれからの全国総合文化祭開催県、香川県なんかも入ってるんですが、どうしたらいいのかなというふうなところで、視察に来られるんですが、徳島はずっとこれが続いてますので、徳島の方でずっと続いてきているものっていうのを大事にしながら、全国に発信していけたらなというふうに思っています。

次に、ご存知の方も多いと思うんですが、今、高校入試の方で阿波おどりと人形浄瑠璃、これを育成型選抜という中で、何校かが取り入れて人材育成につながるような、そして部活動として活性化できるような取り組みもしているところで、この辺、今年一年生が初めて入ったのですが、募集がうまくいった学校と難しかった学校とあるんですけど、しっかりと力を入れて、これも部員数の増加につなげていきたいなと思っている

ところです。

先程来、ホールの話が出てきておりますが、こちらについて高文連の音楽部門の方からも少し話を聞いておりますけれども、やはり現状としましては四国四県で持ち回りの大会とかをしておるわけですけれども、残念なことに、今現在は、徳島県を飛ばして開催持ち回りをしているというような現状があるということで、四国内の大会であるとか、また全国大会の誘致も今できない状況です。そういうことを考えると、大ホールに加えてリハーサル室、そしてやはり小ホールという、このセットが必要であると、音楽部門の方からは話が出てきているところです。こちらについては本当に色々な難しい部分もあると思いますが、やはり、高校生というところに限って言いましても、新ホールってというのは、全国の生徒たちと交流することで、気持ちも高まってまいりますので、ぜひそういう環境が実現していただけたらなというふうに思うところです。以上です。

委員

よろしくお願いいいたします。まずこの5年間、今年度が多分完成年度になると思うんですけれども、県の皆さんは大変だったと思います。特にコロナという予想しがたいことが発生しましたので、実行されるにあたって本当に大変だったと思いますので、私も何年か委員をさせていただいて、まずそこに敬意を表したいと思います。お世話になりました。

先ほど後藤田知事からお話がありましたが、ある意味で今変わるチャンスじゃないかなと後藤田知事になられたことを機会にというふうに思います。継続性は大事ですが、それでは継続性が多ければ、発展がないように思いますので、検証するときには別の視点を持ち込むということが大事なのではないかなというふうに思います。それで例えば、資料3の矢印の下に3つの視点があります。この資料を用意してくださったので、これに即して言いますと、例えば人材育成と、先ほどたくさんの方の委員の方が述べられたように、文化の担い手を育成するということ。それはすごく大事なことだと思いません。実はでも、うちの大学で悩んでいることの一つの大きなことに18歳人口の減少という、もうこれは避けられないことで、直面しなくちゃいけない問題で、どうすべきかということが切実な問題になってます。そうすると担い手を大切に育てることはすごく重要なことであるんだけど、もう人口が減っていくのであれば、それを食い止めることと、呼び込むことを考えないといけないと思います。Iターン、Uターンもありますが、徳島の魅力に目覚めて出て行かない、それとまた、県外でいて、また戻ってくる。それと、新たに徳島のことを発見して、面白いことをやってるなということに気づいて来てもらえるという観点で見るとも大事なかなというふうに思います。そのために大事なのはやっぱり魅力発信、二番目の魅力発信になると思います。魅力発信するというのは非常に難しいです。私も徳島で生まれた人間で、高校まで徳島でいましたので、徳島の良さ本当にわかっているつもりです。わかっているつもりではあるけれどもよく県外の友達とか、それから東京出身の夫に言われることは徳島いっぱい、いいところ持っているのにそれをほかの人にわかってもらう、ほかの県にわかってもらうのが、ちゃんと

できてないから、惜しいというふうに言われます。その持っている自然も含めて、いろんな財産文化も含めて持っているものをどうやって発信するか、それはやっぱり方法もあると思いますが、やっぱりイメージ戦略だと思います。正直言いまして「vs 東京」がなくなって、「vs 東京」でなくなってよかったと思っております。ずっとあれできてたので、その度にあれを封筒で見たりするたびに、なんか考えた方がいいのになと思ってたので、それも変わる機会でもある、知事さんも変わって、ロゴも変わります。何か新しい徳島のイメージをより積極的に全国に、世界に、海外へという視点がないように思うんです。せっかくコロナで得たことのいいことは何かというと、どなたかがおっしゃったように、Zoomとかいうのがあって、国際会議に出ることが出来るんですね。学会なんかしてても、海外からの人が入ってきます。今まででは考えられなかったような手段も手に入れることができましたので、海外へ発信するという、もっと積極的にやってもいいんじゃないかなと思います。イメージ戦略で、県外の友達がやっぱりお遍路の町だよなって、徳島の人、徳島だけではないかもしれませんが、お接待のおもてなしの、ウェルカムの気持ちがすごくあるってことは、外国人の人にもよく言われます。だとすると人にやさしいということもLGBTQの方で、例えばSDGSはいろいろ徳島もやってます。やってますが、もうちょっと、環境とかだけでなく、すべての人に平等とかジェンダー平等とかのゴールの3番か5番だったと思うんですが、例えば、LGBTQの人へのパートナーシップとかフレンドリーシップ、人口のカバー率は四国では香川100%なんですね。すべての市町村が参加してて。徳島は70%ぐらいだと思います。それは徳島市、美馬市とか、色々宣言はしているんですけども、まだ70%です。これは多分、最近のことは分からないんですが、全国平均と同じぐらいだと思います。愛媛や高知よりは進んでるんですが、福岡は県全体でもしてますので、100%です。それで言うと、福岡なんかはやっぱり、スタートアップ企業が多い。2年ほど前、イギリスのBBCに注目されてました。福岡はアジアに直結しているという立地的にも羨ましい側面があるんですが、それでもスタートアップ企業がたくさんあるということは、単に経済だけでなく、文化の面でもどこかで結びついているのがあるんじゃないでしょうか。文化を企業と結びつけるということがここでも考えられると思いますので、そういう意味での、私は専門家ではないんですが、クリエイティブエコノミーという言葉があります。文化をエコノミーに、経済につなげていくのは観光だけではない。もっとクリエイティブなもので、例えばLGBTQに理解のある100%パートナーシップが認められている県で、それをもっと全面に出すと、いろんなイベントが、本来は全国的に行われているイベントが徳島でも行われるようになるかもしれない。先日、沖縄に父母会があって行ってたんですが、沖縄ではLGBTQのパレードみたいなイベントもやったりして、それを文化に結びつけました。海外とか、人権とか多様性、包括性ダイバーシティとか、インクルーシブを取り入れるような文言があってもいいんじゃないかなと。なんとなくこう、内向きのような気がしますので、もっともっと、これを機会に攻めに出るような発想があっても良いかなということを感じました。

委員

よろしくお願ひいたします。藍染研究会は毎年6月に総会をしております。藍というものが、文化だけにとられるものではなくて、その人の生業であったり、産業、農業または教育というような幅広い分野に係るものでありますので、それらの立場の方たちが藍染研究会にはたくさん参加をしてくださっています。自分で、すくもを作られて、製品まで作られているような作家さんであるとか、団体の職員さんであるとか、たくさん入られております。藍に関する業務を行っている部門というのが、県庁の中にもたくさんあります。今回は新未来創造課の方、文化・未来創造課の方、観光政策課の方の、藍の担当者の方に来ていただきまして、現場で困難に思っていること、改善してほしいことを、いろいろざっくばらんに、お話をさせていただく機会がありました。今回来ていただけなかったのは農業の関係の部分ですね。その藍をとらえられる時には割と作品展であるとか、新しい食品ができたとか、塗料になったとか。新しい使いかたをするもの、その商品とか、モノに目が行きがちということなんですけれども、結局、今でも、すくも作りに関わる農業の部分っていうところは手薄になっておりまして。作家さんたちに、充分なすくもが行き渡っていないような状況というのはあまり改善されておられません。藍を捉えるにはものすごく幅が広いというか、原材料から製品までの幅広い部分を扱わなければいけませんので、そのあたりを、何も分からずに製品のことだけをアピールされていくってというようなことになると、やっぱり現場としては、かけ離れてくる部分がありますので、できれば作家たちとか現場の人たちは、割とまとまっているんですけれども、政策を打っている県や市の方たちも現場の声を各部署と情報共有していただいて、私たちの方にまた情報提供して頂けるように双方向でやれるようにしていただけたらと思っております。

私たちの藍染研究会の方も、文化・未来創造支援費補助金をいただきまして、自分たちで藍の文化をどのように伝えていくのかを考える勉強会を立ち上げています。コロナの影響がありなかなか大人数で集まることができませんでしたので、その講演会やワークショップの内容を映像で記録させていただきまして、会員に向けて、それと県の方も入っていただいているんですけれども、facebookで「つなぐを考える」というfacebookグループを独自で立ち上げております。そこの中にはメディアの方、藍に直接関係はしてないけれども、藍文化の発展と継承について、興味のある方という方を入れて運営をしております。その方たちに向けて、Youtubeで配信をするというような形でさせていただいております。今年度もその補助金をいただきまして、今回は9月にまた開催させていただく予定になっております。同じ補助金で四国大学も今回大変、大きな補助をいただきまして、四国大学の藍の家という藍染の専門施設があるんですけれども、そちらで所蔵しております藍の展示を8月に文化の森でさせていただくことになりました。そこに基調講演として、明治大学の先生にもお越しいただきまして、講演会も開催させていただくようになりました。ありがとうございます。

委員

よろしくお願ひします。昨年、実際に「とくしま音楽祭」に出演させていただいての感想になるのですが、徳島県出身の住友紀人さん率いるスペシャルユニットとして 日

本を超えて世界で活躍されているようなプロの演奏家の方と一緒に演奏させて頂いて、私自身もとても刺激になりましたし、改めて音楽の楽しさを実感できる機会だったなと思っています。また、この演奏会には徳島中学校のオーケストラ部と徳島交響楽団の方も出演されていたのですが、舞台裏で徳島交響楽団の方が中学生にバイオリンの弾き方を教えているシーンだったり、一緒に演奏する曲を練習していたりという場面を見て、中学生の目がとてもキラキラしていて、こういう機会がもっともっと増えたらいいなというのを実感しました。で、皆様の意見からもあったように、小さい頃から生の音楽に触れる機会、音楽や芸術を等して様々な世代が集まって交流できるような機会が、これからはもっともっと増えていったらいいなと感じています。以上です。ありがとうございました。

委員

時間も押してるようなので、簡単に申し上げたいと思います。まずはここ数年、コロナ禍の中で、大変団体の活動等で支障があったと思うんですけども、あわぎんホールにおきましては、だいぶ利用が向上してまいりました。今はもう、ほぼ通常並で、今年は非常にお借りいただいて、大変ありがたく思っております。先程来、あわぎんホールについても、ご意見いろいろいただきましたけれども、できるだけお使いいただく方に寄り添った運営をしてまいりたいと思います。どうしても施設に制約等もございますので、県とも相談しながら、良く運営していければと思っております。そして、この資料の中にもございましたけれども、公演回数という指標もございましたけれども、ここ数年、極端に減ったわけでございますけれども、今年は特にいろんな、外部資金等も活用しまして、事業数を増やして参りたいと思いますので、どうかご覧いただければと思っております。

知事の方からもご挨拶ございましたけれども、芸術は地方創生だというお話もございました。文化振興財団としても徳島県の振興のために一生懸命努力して参りたいと思いますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。以上です。

委員

よろしくお願ひします。三点に分けて端的にお話をしたいと思ひます。

まず、県外の友人知人が徳島の観光に行きたいと言えば、一番に大塚国際美術館に行き、ドイツ館に行きます。しかし、そこで流れが切れてしまいます。この前、大塚国際美術館に何年かぶりに行きましたが、美術館自体も大変進化しておりました。手前に駐車場ができたり、内容のもそのままでなく、皆さんに喜んでいただけるように工夫しているなというのを感じられました。そして学芸員と話したら、前に比べて滞在時間が長くなっていると仰られていました。団体や修学旅行がさっと来て、決められた時間になるとさっと帰るといふ人が多かったようですが、近頃は若い人達やカップル、一人旅でじっくりと鑑賞したいといふ人が増えているようです。そこで私が思ったのは、その人達をいかに鳴門市から徳島市に引っ張ってきて、徳島市内での滞在時間を増やすか、その動線をどうしたら作れるかということです。徳島の文化の魅力を知らせるため

に、鳴門市から徳島市に引っ張っていく。それは努力すればできると思います。なぜなら、文学書道館、文化の森の博物館、美術館や文書館は本当に県外に誇れる内容だと私は思います。私は県外の人が来たら、必ず文学書道館や文化の森に連れていき、説明するようにしています。でも、その動線が無いので、それを何とかしたい。そして鳴門市まで来て、淡路島に泊まって帰るというのではなく、徳島市へ。そしてまた、他の町村にも足を運んでもらえるような流れができないかということを感じました。

2点目は、この前、城崎温泉に行きました。城崎温泉の駅にはすぐそこに観光センターがあり、丁寧なマップと割引のチケットをいただけます。そして、そのマップを辿る散策がすごく楽しいのです。何が楽しいかというと、そのマップの中には商業施設が全部入っており、美味しいものをたくさん食べたいという気持ちになり、それが楽しいのです。そして、志賀直哉の文学館にもオープンと同時に行了きました。失礼な言い方ですが、文学に興味のないような人もたくさん来ています。観光の流れができています。だから、徳島でもそういう流れを作りたいと思うのです。徳島駅から文学書道館に行くにしても、藍場浜の公園を通ったら歌碑や句碑などたくさんあります。今ブームの寂聴さんが徳島新聞から出している本も、ものすごく売れてると言いますので、それだけ注目されているのを利用して寂聴さんも含めて動線を作っていけないかと思います。徳島市の文学、散歩みち、史跡巡りなど、どこからどう行き、その間にはこんな魅力があるということが、発信できてないと思います。その道中の魅力の発信は、公募がいいと思います。私もこの前、歴史・文学散歩と銘打って、国分寺から国府町をずっと歩きました。国分寺、蔵珠院のまいまい井戸、櫻間の池の碑と人形のムラなど、自分で考えて作りました。そういうふうに各地域の魅力を公募して、ここには徳島ラーメンがあるとか、その場所でここの食べ物が美味しかったとか、地元の方は分かると思うんです。それを公募して本当に詳しいマップができたなら、もっと魅力が上がるのではないかと思います。例えば徳島駅から阿波おどり会館行くまでのマップにしても、もっと面白い部分ができるのではないかと思います。

3つ目は、私は徳島ペンクラブに所属しております。最新のペンクラブの本では、各駅停車の旅を特集しました。徳島県の78の各駅に停車し、駅舎の全てを写真に撮り、ひとりひとりがそこにまつわるエピソードを書いて特集しました。去年は水辺の物語や、歴史的建造物など色んなシリーズをしているのですが、今年各駅停車の旅、駅舎を巡るということは、ものすごく影響力がありまして、もう本がなくなりました。本屋さんでもあつという間になくなりました。このことから、鉄道が赤字で大変だということでも、いろんな駅を行ってみたいという人、そこにある昔の思い出話をたどってみたいという人が、こんなにもいらっしゃるんだということを感じました。それでファミリー用や一人旅用、グループ用などありとあらゆる層に向けた徳島の各駅を紹介する、そういう観光のアピールも欲しいです。いろいろ申しましたがこれらが文化による経済効果の発展にかかってくると思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

委員

よろしくお願いいたします。NHKでは経営計画のひとつに、「社会への貢献」を掲

げています。これは、日本各地に残る伝統的な文化芸術、歴史的遺産となるものを記録して未来へつなげるというもので、この経営計画のもと、NHK徳島放送局では徳島の文化や伝統などを記録して、皆様に貢献していく、世界へも発信していく、放送などを通して発信していくという役割を担っています。

最近では6月にローカルで阿波和紙をウクライナに送って公文書の修復に使ってもらおうという番組を取り上げました。この番組は、今月6日には、全国でも放送され、徳島の文化伝統などを全国に展開しているという状況です。その他にも、先月末は人形浄瑠璃がアメリカで紹介されるというニュースを取り上げさせていただきまして、世界的にPRして行くという姿をNHKという公共メディアを通して、展開しました。こういった形で、NHKでは地域の魅力や文化をPRすることができますし、それが強みだと思っていますので、皆様と情報共有させて頂きながら、徳島県の文化の発展、継続のお手伝いができればと思っています。よろしくお願いいたします。

委員

よろしくお願いいたします。美波町ということで、この中では特にわたしが唯一の過疎地を代表しているということになるかと思っておりますので、美波町の現状そのまま、過疎地の現状と、お願いになるかと思っておりますが、ご意見を述べさせていただきます。

まず一つ目がユネスコの無形文化遺産登録で、風流踊りで西祖谷の神代踊が注目を浴びたということで、どうしても徳島でいいますと阿波おどり、人形浄瑠璃がスポットライトを浴びるといった現状の中で、こういった地域の伝統舞踊といいますが、伝統芸能がスポットライトを浴びたということにつきましては、我々地方の文化行政に携わる者としては、一つのチャンスとして何とか取り組んでいかなければいけないと思っております。当然、美波町日和佐赤松地区でも、神踊りといった踊りはございますが、当然、皆様、もう存じ上げてないというのは承知しておりますので、こういった中で取り組んでいくということが必要なのかなと思っております。そういう中で、先ほどから委員の皆様から出ております。次世代への後継者の活用ということですが、なかなかやはり今の私の子育ての現状からも述べさせていただくと、今の小学校、中学校というのは当然、勉強にも忙しいですし、また、総合学習とか、こういった文化芸能以外でも地域の歴史を学ぶとか、あと体育運動でもすることがいっぱいあるということで、なかなかすべてのことを、この小学生、中学生というのがサポートできないというのは現状であろうかと思っております。そういった中で、特に美波町日和佐っていうのは高校2つあったんですが、これが2つとも休講になって、統廃合になったということで、高校がなくなったということが今さらながらボディブローのように効いてきているのかなと思っております。ですから、どうしても地方の町村で言いますと教育委員会が社会教育も担っておりますが、なかなか教育委員会といいますが、学校教育に目が行きがちになるかと思っておりますが、こういった、高校生を踏まえて、また20代30代といった若年世代、我々40代50代といった中年世代も含めた後継者の育成が求められているのかなと思っております。こういったところがまず一点目の過疎化についての課題かなと思っております。

二点目がやはりコロナの影響っていうのが非常に大きいかないかなと思っております。美波町の旧の日和佐地区では、皆様もご存知かもしれませんが、チョウサと言いまして太鼓屋台、こんな小さな町で8台の太鼓屋台を持っておりまして、これが大浜海岸から海に流れ込んでいくという勇壮な、県内でも有名なお祭りを持ってありますが、一番小さな町ではたった20世帯で、このお神輿を運営していかなければいけない。当然、このうちの20世帯のうち12、3世帯はもう高齢者60歳以上の世帯で、若年世代は当然おりません。そういった中で、チョウサを運営していかなければいけないといった中で、例えば徳島文理大学とか徳島大学、また四国大学といった留学生をはじめとした学生の皆さんにお手伝いをして頂くという、いわゆる地域との交流活動を進めており、頑張っていたところですが、このコロナ禍の中でこういった交流についても一旦途絶えたということになっております。ですから、今後、こういった交流をどうやってまた元に戻していかなければいけないかなっていうところが、直面した課題であろうかと思っております。

また、そういった交流の中で、徳島県の南部総合県民局や四国の右下観光局の皆さんと一緒に、地域伝統、地域文化を観光資源に変えて、そうした中で地域の活性化にしていこうというような取り組みも現在進めておるところでございます。どうしても人材も少ない中、やはり今まで通り、県や国といった補助だのみではなく、地域からも、足を一歩ずつ踏み込んでいかなければいけないのかなというふうに思い、活動をしておるところでございます。

最後になりますが、少し話がそれるかもしれませんが、せっかくですので美波町のPRといえますか、美波町は皆様もご存知ですが、県南の文化振興の一助をになっております。世界でも珍しい「日和佐うみがめ博物館」というものを運営しております。この「日和佐うみがめ博物館」も、もう30年余って経過しておるということで、今年度から令和7年度まで3か年にかけて館内の展示、また、屋外プールと、一新して全面リニューアルを進めているところでございます。また、この4月から日本ウミガメ協議会副会長の平手康市氏を館長として、初めて外部から招聘致しまして、美波町が進めておりますSDGSの推進、またさらに魅力ある文化施設となるように取り組んでおるところでございます。以上で簡単ではございますが、私の説明とさせていただきます。

委員

よろしくお願いいたします。

昔から徳島は芸所と言われ、その土地に根差したさまざまな芸能や生活文化を育んできました。その底辺にはやはり藍師や藍商が関わって、阿波の芸能が日本の代表的な文化となっています。

それから、上から言われるでなしに、庶民から必然的に阿波おどりが蜂須賀家政公の時代より400年続いており、人形浄瑠璃も続いております。それらは日本の、徳島の代表的な文化ですが、戦争に負けた日本に欧米文化が押し寄せ、ギターやバレエ等の欧米文化が発達し、日本の昔からの踊り、笛、太鼓なんかは忘れ去られたような状態です。

日本舞踊協会も、私が若い頃には300人近く会員がおりましたが、コロナのせいばかりではなく、もう200切り、今は100もちょっと切ったような状態です。日本舞踊協会徳島県支部としても、残ったものが結束して、次の世代へ無形の文化遺産を残すために、これからも精進してまいりますので、一日も早く県民ホールを実現させていただきたくお願い申し上げて、簡単ですがご報告いたします。

副会長

ありがとうございます。まずコロナ禍で大変ご苦労も多かったと思いますが、この5年間、その中でも工夫を加えながら実績をあげられたということに、まずは敬意を表したいと思います。少々、KPIと言いますか、達しなかったところはございます。デジタル化を図っても、いかんともしがたい部分はあったのかと。そこはやむを得ないというふうに考えております。

一転してまず今後の計画でございますが、先ほど資料3ですかね。そちらの方で説明もしていただきましたように、やはり、大きく3つ、人材育成、活動支援、それから魅力発信と観光等の経済効果を合わせ技でという3つございました。もっともな方向性だと思えます。

徳島大学の状況でございます。例えば、魅力発信という意味では、今の新しい技術ということで、阿波おどりとARですね。ARをミックスした、デジタルの関係で、新しいその技術を伝統文化と合わせて、披露するということが今展開をされておまして、伊藤園という大手の会社と共同研究で、今やっております。

それから、観光振興と先ほどのJRが赤字だというお話も、いろいろございましたように、徳島大学は、他の四国の国立四大学、総合大学と一緒にJR四国さんと連携協定結びまして、毎年学生発案の2つのツアーをですね施行しておまして、今年度は海陽町と松茂町のツアーを組んで、既に行っております

先ほどお話しいただきました海陽町の竹灯りも見られたようでございますが、そういった形で学生がですね、先ほどお話ありましたように、駅周辺の観光施設、伝統文化施設、それから地元のかたがあまり気付いてないようなものも発見しながらですね、プランを組んで、それを一つの売りにしてツアーを組むといったこと。こういったことは、これから大事になってくるかなと思います。こういったことで、大学生を中心に、特に1、2年はある程度余裕がある学年でございますので、3年からまた専門が入ってきまして、あるいは資格試験等が入ってきて忙しくなりますが、大いに活用していただいたらありがたいなと思います。

また、藍染なんかで今、鳥人間コンテストを今度7月下旬に開催して、放映されるようなんですが藍染を活用した、いわゆる飛行機ですね。飛行機を作っておりますので、それもアピールしたいというふうに学生申しております。そういった形で魅力発信等努めていきたいと思えます。そういったものに、県もできたら少額でも結構なんで補助金を出していただくというようなことも考えていただけたらと思います。ホールの話、知事のお話の中でございました。我々の審議会でもどこまで議論すればいいのかどうか、そこは疑問でございますが、後で事務局の方からそういったお話もしていただけれ

ばと思いますが、今後の新しい計画立案に向けてですね、皆様方の今後ますますの貴重なご提言をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。ありがとうございました。

会長

ありがとうございました。委員の皆さんからは、多方面から熱のこもったご意見をたくさんいただきました。ここでまとめて、事務局から回答お願いしたいと思います。

事務局

各専門分野の皆様方からの貴重なご意見、ありがとうございました。時間も迫っておりますので、大きく2点に分けて、こちらの方からご回答、ご報告とさせていただきます。

まず一点目につきましては、ホールでございます。ホールの現状なんですけど、なぜ2,000席かという話がございました。2,000席というのは、やはり興業する上でも、ある程度、座席数が必要であるという判断と、近年、都道府県レベルで、2,000席が多いというのを元に、現計画は2,000席および小ホール400席という形になっております。一方ですね、やはりコスト等の事もありまして、先ほど知事の方からお話をしたように、1,500席、小ホールなしという案もございます。そのあたりの状況を、今回整理いたしまして、今後はパブリックコメント、もう一度皆様のご意見を聞いて決定するという事になっております。知事が挨拶で申し上げましたように小ホール、小規模なホールというのは県内各地にございまして、その利用率が10%だったり、30%と非常に低いところがございます。こちらの方につきましては、できましたら、その各地元の方で、先ほど委員の方からも、部活動の地域移行では、そういう小規模なホールを活用するのもいいんじゃないかっていうのもありましたので、そういう点でも活用していくというのは非常に重要なことかなと考えております。一方、やはり小ホールというのは、なかなか県内でも満足できる、誇れるようなものがないというふうな御意見もございましたし、スポーツ施設とも合わせて、やはり子どもたちがワクワクするような施設という話もございました。そのような意見等も踏まえまして、今後また検討して参りたいと考えております。

もう一点目は、皆様方からの意見の中で、やはり魅力発信というか、今後の少子化の担い手育成の分でございます。これは、プロムナード的な道で賑わいをというのもあったのですが。他、やっぱりPRをと、あと、やっぱりイメージ戦略が必要と、様々な意見もございます。やはり担い手、若いうちにプロの人と、一流のものに触れていくというのが大事であると、やはり学生の時から本物の体験をしていくと、そういうものが自分の誇りとあわ文化の継承と共に徳島への誇りのようなものになり、UJターンというのだけでなく、徳島に残り、また、それを県外に発信して行くようなものになっているものだと考えております。

各委員様から、いろいろご意見を伺いましたこと、非常に貴重に思っておりますので、その辺りも含めまして、今後、この計画に反映して行きたいと思っております。

簡単ではございますが、事務局からのご回答とさせていただきます。

会長

ありがとうございました。今年度はちょうど、節目の年であり、次の5年間の文化振興の計画を立てるということと、知事が変わったということが、大きなことだろうと思います。ご意見にもありましたように、文化芸術の振興は、経済効果とか経済活動とも繋がっております。地方創生という意味で、大きなファクターであると考えられます。

ある劇作家の方が、地方大学の教授もされており、その講演を聞く機会がありました。人口減少とともに、若者が地方からどんどん大都会へ出て行く理由は何か、若者に聞いたところ、地方では出会いがないっていうんですね。地方にいたんでは出会いがないと。それなら出会いの場をどんどんつくればよいと話されていました。それはそれとして、文化芸術でハード面も含めて賑わいを創出するということは、大変重要と思います。一方、学生を見ていますと、地域の歴史伝統文化にも興味をもつ者が多い。人形浄瑠璃や阿波おどりは県外出身の学生の関心が高いですね。また、徳島県の、にし阿波の傾斜地農業、農業遺産の見学に学生は喜んで参加していますし、しか肉を使ったジビエ料理の開発にも熱心に取り組んでいます。

今年はあと3回、審議会が予定されています。次の5年間の文化芸術推進計画を策定するという大きな節目の年であります。文化芸術ホールも含めて、この委員会がどの程度まで意見が提言できるのかわかりませんが、審議会で議論し、提言できることは積極的に提言していきたいと考えています。それではこのあたりで終わりたいと思います。議事進行に御協力いただき、ありがとうございました。